

浄土

1990-9

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授受承認雜誌）第三二五号
平成二年八月二十五日印刷
第五十六卷
九月号
平成二年九月一日発行





九月の秀句

水澄みて恋をする瞳がよくのぞく

加藤 知世子

秋出水真ん中のみが空映す

岡村 天錦草

秋の田のいづれの道をかへらむか

葛山 たけし

九月号



弥陀の願力を深く信じて、一向に
念仏をつとめて、往生せんが如き
なるべし。

——『念仏大意』

目次

——随想(Ⅰ)——

ブレーズさんにたよりする……………宮 沢 善 弘……(2)

《にこにこ法話》

ミーちゃんオバタリアンに泣く……………長谷川 岱 潤……(10)

＜いのちを考える⑤＞

いのちの余韻……………佐 藤 雅 彦……(18)

——植物人間を看取る——

読者のページ

日本における浄土教の高僧たち(下)……………上 野 浩……(25)

季語やぶにらみ(5)……………木 下 隆 一 ……(33)
秋の七草のうち朝顔

◇◇連載・話の旅(二)◇◇

天草に旅して(二)……………松 浦 行 真……(41)

表紙絵 小林治郎画

(I) (想) (随)

ブレイズさんにたよりする



宮沢善弘

(横須賀市正観寺住職)

私が学生だった、およそ五十年も昔の話です。学習ゼミの時間に、ある日たまたま教授から面白いことを聞きました。

デカルト、そうです哲学史上画期的存在であり近代哲学に大きな影響を与えた、かのデカルトに、その同時代、はっきりと対決の姿勢を示した人がいた、という話でした。

その言葉は……

『デカルトは無用にして不確実』（七八）

『私はデカルトをゆるすことができない。彼は彼のすべての哲学において、もしできたなら神なしですましうることをのぞんだかもしれない。が、世界に動きを与えるためにはどうしても神をして一と押しさせないわけにはゆかなかった。しかしそれをさせた後はもう神などは彼にとりどうでもよいものになってしまっている』（七七）

私は驚き、かつ、新鮮な興味を初めて貴方に感じたものです。

今年はお盆が近づいた頃、どういう訳かしきりに貴方のことを思いだしたのです。

私たちの地球は今日、人間が性懲りもなく引き起こす様々の問題で次々に揺さぶられ、人類の生存や生命体の生き残りが危やぶまれるといわれるほどに変わりました。人間が人間に対して何かのしつかりした枷（かせ）を掛けなくてはならないという、誠に矛盾した切実な情勢の下にあります。

こういう状況の中で私は、今置かれている片隅の生活空間で、何一つ効果的なことができず、ただオドロオドロしている自分が歯がゆくてならないのです。交通・通信その他の

進歩で、これほどに狭くなった地球です。私は自分の職分を通して何かをしなければなら
ないと、心は焦るが、実は何もできないのがもどかしいのです。

そういう気持があつてか、貴方のことが脳裡に浮かんのだと思います。

貴方は天才と呼ばれ、また著名な数学者であり、卓越した物理学者でした。そのような
貴方と、私ごときが短絡してお話しができる筈はなし、友人になるなど正に次元を逸脱す
るも甚だしい所業だと言われそうですが、貴方と私とはピタリ三百歳の年令差がありま
すので、この差のお蔭にアマエ、人間的苦悩を共に抱く宗教者（クリスチャンと仏教徒）同志
ということとで誼を結び、この離れ技の実現を可能にさせて頂きます。

それはそれとしても、私の方には幾らか面映ゆい気持があります。そこで、世に知られ
る有名な貴方の「姓」ではでなく、クリスチャンネームである「ブレイズさん」を使わせ
て頂きました。悪しからずご了承下さい。

さて、天才薄命というか三十九歳で没した貴方ですが、伝記によると、最後の九年間は正
に珠玉のようにその命を輝かせました。

その貴方がお国のフランスでカトリック教徒なのにプロテスタントの側からも親愛され

たのは、貴方の信仰がキリスト中心で広く深い「愛」に貫ぬかれていたことに帰するからだと思います。もし貴方が日本に生れていたら、きっと、と、そう思うのですが、私が最も尊敬し心酔する法然上人という方の仏法に心を寄せられたことでしょう。

法然上人という方は、貴方より四九一年前にお生れになった方です。不思議なことに、貴方の宗教的回心の吐露や心情や思想の多くに法然上人と一致する所があるのです。これは偶然というよりも、真実の宗教心の巧まない深層での一致だと思うのです。貴方は大乗仏教を知っていらっしゃったのではないかとさえ思われます。

『私が知っていることはただ私がやがて死ななければならぬことである。しかし私にとって何が分からないといって、私のさけ得ないこの死ほど私は分からないものはない』（二九四）、これなどは、上人の『是を知らずしてつねにさかえん事を思い、是をさとらずしてつねにあらん事を思う』に相応します。

『我々はイエス・キリストによってのほか神を知ることができない。この媒介者なくしては神とのいかなる交わりもない』（五四七）は、上人の一紙小消息にでる『積尊は善きかな我が教えに随いて生死を離ると知見し給い……』の言葉に符節が合います。

神があるということの不可解さ、靈魂が肉体と共にある不可解さ、等での『不可解さ』は仏教の「不可思議」と同意語でしょう。

前に申したとおり、私が感動するのは、貴方の信仰がひと筋に『愛』によって貫ぬかれているところです。仏教では慈悲を大切にします。しかしこの際、『愛』と『慈悲』の違いを比べるのは知恵ない所業です。

貴方が死の直前、貧しい者のためにしたあの大きい愛の施しは、世界の人々がそれによって結ばれることを願った、貴方の『愛』の精神の現われだったと思うのです。

次に、二十一世紀になると、一層深刻な事態を迎えることになるかも知れない今日的問題があります。

それは生命科学（遺伝子の操作に関すること）とか、広くは医療の問題ですが、紙数に制限がありますので、話を絞って、臓器移植のことだけを取り上げてみようと思うわけです。

本題に入る前、私ごとで誠に恐縮ですが母が近頃アルツハイマー型痴呆か、それがこうじてただ生きているだけのようになってしまいました。若い頃は胃腸が弱く、貧血の気もあって本人は苦にしていきましたが、お医者さん（医療）の処置がよく、その上に自分の健康管理や家族の者の介護もよかったのでしょう、とにかく九十四歳にまでなりました。

しかしこのところすっかり弱って、一日一日に生死の境をさまよっている様子ですが、

これだけ長く生きれたのは、医療の恩恵を第一と思わない訳にはいきません。

今日の医療は、正に人間を充分に生かして長命を全うさせてくれます。これは人間が蓄積した今世紀の素晴らしい成果の賜物です。

だが、わが母を見て思うことがあります。

母はよく念仏をした人です。そうして今日まで医療の恩恵を最大限に受けて生きてきました。さいわいに臓器の交換とか、さらには三十六時間以内の移植臓器が必要で、慌てて脳死の提供者を探してもらおうということもありませんでした。そうして今は自然に、安らかに一生の終わりを待っているようです。

人が生きるということと、それを助ける医療とが極めて理想的に関わり合った事例の一つだと思います。

避け難い死と有限なる人命に関わり、医療が向かう究極の目的とは何でしょう。

人の死とは、人その人なりのものであり、死の判定は生物学的であれ医学的であれ一律に済ますことではなく、死後の遺体の取扱いにも多くの問題が堆積している時に、宗教に携わる私は、科学と宗教の関係についての貴方の決定的な提言を思い起こすのです。

『理性の最後の歩みは理性を越えた事物が限りなくあるということを認めることである。もしそれを認めるにいたらないなら理性は弱いものにすぎない。自然の事物が理性を越え

ているとするならば、超自然の事物について人は何を言いうるのであろうか』(二六七)

ブレーズさん、貴方の場合の『理性』とは科学、または、科学的の立場ということでしょう。そうして『超自然の事物』とは、貴方にとって神・信仰それ以外のものではなく、つまり、宗教ということでしょう。

だから……

『理性にとって、理性の否認ということほどふさわしいものはない』(二七二)

という言葉に重みが増すのだと思います。

貴方の明晰なこの提言は、今日、私達に大きな示唆を与え、なお、グロウバルな視点で科学・技術優先を抑止しようとする陣営に正当な方向づけを下すものだと思います。

また……

『我々が真理を知るのは、理性によってのみならず、心情によってである。我々が第一(基本)原理を知るのは、後の仕方によってである……』(二八二)

『神を感じるのには、心情であって、理性ではない。これが信仰というものである。理性ではなく心情に感ぜられる神』(二七八)という言葉から、現今の臓器医療における重大問題や、あるいは脳死の判定などに対する貴方の見解を私なりに整理してみると……

『二つの極端。理性を排除することと、理性をしか受け入れぬこと』(二五三)の一方的な

極端に偏することを避け、理性と心情の調和を一層促進するべきだ、でしようか。

『……なぜなら、これらのもの（科学と宗教）のもつ支配権はそれぞれ種類のちがったものである。これらのものは理解しあうことがない。そうしたこれらのものの誤りは至るところで（相手を）支配しようと思ふことにある。そんなことは何者にもできない』（三三三）

これが結論だと思います。

ブレーズさん、貴方の、科学者でありかつは敬虔な宗教者としての見解は、我々仏教徒にとって参考になるばかりでなく、二つの立場の者が、共に問題の前向き打開に立ち向かうという時の勇気づけになるでしょう。

今日、経済優先の近視的で狭い視野に立つ実利主義の中で、医学の進歩がややもすれば影響を受け、ことの功罪を厳密に分析しようとすることに遅れ、また、宗教界（私の場合は仏教者）も恐れて踏み込もうとしない弱さを感じます。人間の本当のしあわせのためには、もっと真底に事態を受け止めて進まなくてはならないと、その感を強くしています。

引用は、津田稔氏訳・新潮文庫・昭和六十二年版『パンセ』五十四刷より。

（ ） 内の数字は断章の番号。

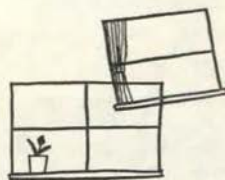
（ ） 内の文字は私註。

に　こ　こ　法　話

ミーちゃんオバタリアンに泣く

ミーちゃんとトモちゃんはプラネタリウム
の帰り道、山手線に乗っていました。
「ミーちゃん、星の物語ってすてきね。あた
し、もう憧れちゃうわ」

「東京じゃあ、雲に隠れて見えないから、お
空にあんなに星があるなんて、想像もつかな
かったわ」
「あたしねえ、この間の夏休みに海に行った



は　せ　が　わ　　たい　じゅん
長谷川　岱　潤
(東京・品川区戒法寺住職)

とき、花火大会があつて、夜ずっと外にいたんだ。花火がすごくきれいだったんだけど、花火が終わってしばらくしてから、まだ打ち上がらないかなあつて思つて、わたしお空見たら、すごい星だったんでびっくりしたよ。すごいきれいだったよ。でも今日ほど多くはなかったけどね」

「いいなあ、わたし、今年も海行けなかったなあ」

ミーちゃんがまたぶつぶつ言っていると、ミーちゃんたちの前に、五十歳位のおばさんが二人立ちました。

ミーちゃんはトモちゃんに目で合図すると、二人同時に立ち上がりました。

「どうぞ、座って下さい」

そういうと二人は、そのおばさんたちの外

側を抜けて出口のほうへ行きました。

「アラ、私たちに。まだそんな歳じゃないわよ」

おばさんの一人はつつけんどんに、そして回りに聞こえるくらい大きな声で言いました。「でも、せっかく聞いたんだから座りましようよ」

もう一人のおばさんが、そう言うやいなや二人は腰を下ろしていました。

ミーちゃんたちは、ものすごく嫌な気持ちになりました。おばさんたちに、二人は失礼なことをしたのか、回りの人はどう思っているのだろうか、二人は話すこともできず、出口のところで、身を寄せるように立っていました。

やがて駅に着き、二人は電車を降り、おば

さんたちを乗せた電車が行ってしまおうと、ト
そちゃんが堰を切ったように言いました。

「冗談じゃないわよ、ああゆうのをオバタリ
アンって言うのよね。最低よね」

「席譲ってあげた私たちが、悪いことしたみ
たいよね、ひどいわよね」

「わたし、もう二度とおばさんになんか、席
譲ってあげないんだ」

「わたしも。せっかく楽しかった一日が、す
っかり気分悪くなっちゃった」

二人はブーブー言いながら、家へ帰りまし
た。

「ただいま、今日ねえ、電車で頭きちゃった
んだ」

ミーちゃんはお母さんに、電車のことをふ
てくされた顔をしながら話しました。

「わたしがしたこと、悪いことなの」

「いや、ミーちゃんみたいな子供が、大人の
人に席を譲ることはいいことに決まっている
わよ。でもねえ、この間隣のおばさんも言っ
てたけど、二十歳位の青年にバスで席を譲ら
れて、ありがとうって言って座ったけど、何
となく自分ももうそんな歳なのかなって、さ
みしくなっちゃったって。おかあさんもその
気持ち分かるような気がするなあ」

「それじゃ、やっぱり譲らないほうが良かっ
たの」

ミーちゃんは、急に不安になって言いまし
た。

「難しいけど、でもそのおばさん座ってくれ
たんでしょ。だったら譲ってあげて良かった
んだよ。そのおばさんたちも回りの人達への

テレでそんなこと言ったんで、内心は座れて喜んでいるよ」

「席、譲るのって難しいんだね。トモちゃんも言ってたけど、わたしもおばさんにはもう席を譲るのよそうかな」

「そんなふうに決めないで、お父さんにもきいてみたら」

ミーちゃんは、どうしたらいいのかわからなくなっていたので、食事も終わり、お父さんの好きな野球放送も終わってから、ミーちゃんはお父さんのところに行き、話を始めた。

「オバタリアンって本当にいやだね。一人では常識のある人でも、同じ年代の人が集まると、どうしてあんなに下品になるんだろうね。お父さんもこの間旅行に行った時、観光地で

トイレに行こうと思ったら、男用の中に、おばさんたちがいっぱい並んでいて、とても嫌な気分だったよ。下品としか言いようがないね」

「お父さんがそんなに怒るの珍しいね。あたしも本当に嫌になったもん、全く同感よ。おばさんのグループには、席なんか譲ることないわね」

「でもね、それは別問題だよ。ミーちゃんは誰のために席譲ったの」

「もちろん、気にいらないけどそのおばさんたちのためよ」

「それはおかしいよ。ミーちゃんがすることはミーちゃんのためなんだよ」

「どういうこと」

「人のためだと思うから、いやみを言われた

り、御礼を言われなかったりすると、何か損をしたような気分になってしまうんだ。でもね、自分のためにしていると思えば、相手がどんな態度に出ようが関係ないんだよ」

「だって、席を譲るのは、相手のためにやることで、自分のためのわけじゃない」

「相手を見て席を譲ってあげようと思い、行動を起こす。その時までには確かに相手のためだと思う。しかし行動に起こした後は、それはもう自分の布施行なのだから、それはもう相手のためではなく自分のためなんだよ。何故ならそのことによって、自分の行が積めんだからね」

「それじゃ、わたしは座ってくれてありがとうなんて言うわけ」

「まあ、そこまで言えたらすごいね」

「ひえい、そんなこと言えないわ」

「そこまでは言う必要はないよ。でもね、そういう気持ちがあれば、たとえ文句を言われても、すみませんという言葉が素直に出るんじゃないかなあ。そしてそういうふうに言われた時、いくらオバタリアンでも態度が変わるんじゃないかな。お父さんはそんなふうに思うんだ。それが仏さんが言っていることだと思うよ」

「ふうん、でもさ、座ったほうが楽なのに、どうして立ってあげたほうがそこまで下に出なくちゃならないの」

「ミーちゃんは本当に座っていたほうが楽かい。ミーちゃんの前にすごいお年寄りが立っても、そのほうが楽かい」

「身体はね、でも、やっぱり立っちゃったほ

うが楽。そんな時は座っててもちっとも落ち着かないもん。そうか、私は私の前に立たれたら、座っているよりも、立ってしまったほうが楽なんだ」

「すごいことに気がついちゃったね。もうこの問題は解決だね。布施行は、気持ちの問題では、される側よりも、する側のほうが気持ちがいいもんだ。このことは仏教もキリスト教も共通した真理なんだよ。」

あ、そうだ確か『アンネの日記』に出てた話だと思うのだけど、こんな話があるんだ。

『ある日アンネがおなかを空かして歩いていたら、パン屋のウィンドウの前に、見るからにおなかを空かせた小さな女の子が、一人じっとパン屋の中を覗いていたそうさ。するとそこに、お金持ちのリースとその友達が大き

なスポンジケーキを持ってやってきた。アンネは素早く木の後ろに隠れていると、リースはその女の子を見ると、

「おなか空いてるのね、このケーキあげましょうか」

と言ひ、女の子にケーキを差し出したんだ。女の子は遠慮して黙っていると、リースの友達は、

「早く食べちゃわないからそんなこと考えるのよ」

と言つて、すぐに自分のもっていた分を食べてしまった。リースの分だけでも相当に大きかったので、アンネはリースがケーキを半分に分けるのだろうと思っていたら、リースは、

「私は家に帰れば夕食があるから」

と言つて、ケーキ全部を女の子にあげたんだ。女の子は喜んで早速ケーキにかぶりつき、顔を上げたら、もうその二人は立ち去ってしまつていたそう。女の子はアンネに気がついて、あわててケーキを半分差し出したが、アンネは、

「気持ちだけで充分」

と言つて、家に帰つたそう。

さあこの中で、いったい誰が一番幸せな気持ちを感じたでしょう」

こういう話なんだけど、ミーちゃんは誰だと思ふ」

「女の子。いやそうじゃないわね、リースなんでしょう」

「大当たりだよ、アンネもその話の続きで、『私はリースが一番幸せな気持ちになつたと

思います』と書いているよ」

「アンネってすごいね、それ十三、四の頃のことでしょう。中学生位で父さんみたいなこと言っちゃうんだね」

「施しをした人が幸せになる。これが真理なんだね」

「また、お父さんに言いくるめられちゃった感じだな。でもね、気持ちすごくすっきりしたよ。明日トモちゃんにも話してあげよう。トモちゃん、きつとまだもやもやしているかもね。私がお説教してあげるんだ」

「ミー上人お願いしますね」

「任せて頂だい」

二人は大声を上げて笑いました。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもつて、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

いのちの余韻

— 植物人間を看取る —

佐^さ
藤^{とう}
雅^{まさ}
彦^{ひこ}



「楽にさせてやりたい」という思いやりの心には、二つのケースが考えられるだろう。本人が「苦しいから楽にしてほしい」と懇願することに応じて、楽にさ

せてやりたいと思う場合や、病人が、健康体で、正常な判断能力をもっているときに、予め選択した状況と現在の状況を比較して、著しく苦痛であると認められ

るとき、つまり、病人当人の意志を基にしたとき、それに応じて起きる心が一つめである。

もう一つは、全く病人、当事者の意志など無関係に（何故なら、意識を失った病人であるから）看護する側が、自分たちの「思いやりの心」を基として楽にさせてやるための方法を講じるケースである。

しかしこれは、危険な状況を含んでいる。我々の「いのち」は、私個人のものでもあるが、私を取り囲む家族や、社会の中でも、代役のいない公の「いのち」でもある。それが、ともすれば、楽にさせてやりたいという美しくみえる心（あの場合には、余計なお節介にもなりかねないのではないか）によって、病人、当事者の

意志とは離れて、むやみな延命を招いたり、死期を急がせたりする直接要因になるからだ。

さて、安定した植物状態のまま、十カ月を過ごしたおばさんは、それでも、全てが倒れた日と同様といった具合にはいかなかった。脹よかだった顔や体も、いっしょか、肉がおち腕先や、脚先などは、かなり骨ばった瘦せたかたになってきた。しかし、顔色は、毎日、欠くことのない鼻穴へと挿入された管からの流動食の栄養の為か、いつもツヤがあり、とても病人とは思へない。お通じとて毎日ある。元来、入るべきところではない鼻から咽喉、気管支へとビニール・チューブが

入っているのだから、その炎症も、次第に良好とはいえない状態になっていった。痰がしきりと出る。それが詰まりかけて、呼吸が乱れ、困難になる。

一般病棟へ移ってから、既に半年が経ち、大病院の特長でもあろう、担当医は、三人目の医師に代わっていた。いづれも、四十代半ばの中堅医局員なのだろう。移動も日常茶飯事なのか、彼らは、初対面の我々の前でも決して動じる気配を見せない。三人目の担当医は、我々に気管支を切開することを薦めた。炎症から生じる呼吸困難は、回数が増えてきている。このままの状態なら、いつ呼吸不全で死に至るともかぎらない。ノドの処を切り開き、直接、管を入れることで、

呼吸は容易にしやすくなり、栄養物を流入するのにも好都合だと説明してくる。

そして、気管支を切開すれば、患者さんが「もつと楽になりますよ」と、彼らの提案した処置の選択を促すのだった。我々は考えた。おぼさんには、意識はない。そして元へ戻る可能性は、おそらくないと診断されている。倒れてから十カ月が経ったが、それでも尚、そこまでして、生命を延ばしたほうが、よいのだろうか。第一、おぼさんは、本当に苦しんでいるのだろうか。担当の若い医局員にとっての「楽にさせてやりたい」思いやりの心は、一日でも、より長く、生命を「生かす」ことの上に立って考える。確かに、気管支が炎症をおこしていれば、

苦痛であろう。痰もつまれば、呼吸もしづらいだろう。しかし、きょうかもしれない、明日かもしれないという思いで、おぼさんの生と死の境界線を、ともに過ごしてきた我々には、そこまでして生かしておくより、もうこんなに苦勞したんだから、自然に、枯れるように往かして、あげてもいいんじゃないか、という氣になつていた。

その後、我々は、住職の旧知である同病院の老医師に、相談をもちかけた。老医師は、「もう切ることはないでしょう」とサラリと答えてくれた。住職は、もう意識が回復しないのなら、からだに傷をつけて、痛い思いをさせたくないと思ふべ、切開は、しないことと決断した。

我々のとつた「楽にさせてやりたい」思いやりの心は、十カ月という時間のなかで「自然に往く」ことを願う氣持ちになつていた。

そのころ、私は、おぼさんのいのちに、とらえようのない不思議さをつめていた。私たちの信仰では、死は、極樂浄土へ往つて生まれると考える。阿弥陀仏の本願によつて、お迎えをいただくことができるという。しかし、おぼさんはどうだ。あんなに、よくお詣りをし、供養し、自ら、阿弥陀様のおかげさまで、と語つて、その名を称えたおぼさんにお迎えは来はしないではないか。あんなに仏さまにお仕えしたおぼさんに、どうし

て、やすらかな死は、やってこないのだろうか。

おばさんの枕元に座っては、いつか必ずやってくる、お迎えの時を思い、小さな寝息に耳をすましたり、手首にさわって、確かに流れている血の響きを感じたりして、互いの「いのち」が、ここにあらることを実感するのだった。

法然上人の御在世に、まさか植物状態の人間がいたとは考えにくい。けれども、意識不明の状態を経て、住く人を見る人たちの姿は容易に想像できよう。

彼らは、心静かに、念仏を申し、仏の来迎引接を待ったにちがいない。来迎と往生に関わる法然上人の御言葉は、「逆修説法」(昭法全・二三四頁)等をはじめとし

随所に表れている。

それらは、おしなべて、「臨終正念なるが故に來迎したまふには非ず、來迎したまふが故に臨終正念なり」という、仏の側に、その主体性を認められるものと理解できる。

私たちの一般通念では、私たちが、この世に生を受け、私たちが育ち、成長し、老いてゆき、私たちが病氣になり、私たちが死んでゆく、といった「私」を主体に据えた生命を生きている。これに對して、法然上人の教えは、どうだろう。私たちは客体であり、阿弥陀仏、仏が主体になっているではないか。

「仏の願力を仰いで強縁とするが故に」——という法然上人の教えでは、お念仏

を申す者には、お浄土へ往くときに、阿弥陀仏のお迎えがあるのではなく、阿弥陀仏のお迎えがあるときに、お浄土へ往くという「来迎あるが故の往生」の関係が、明らかに示されている。「はからいにまかす」という最も頻繁に使う言葉も、理屈では理解していても、ことその当事者になっているときは、いかに教えが身についていないことかを、私は、改めて往生と来迎の不思議さを学び直してみても痛感するのだった。

だが、阿弥陀様からの、お迎えを、まだけただけないおばさんには、我々のこの世に、しっかりとした「いのち」があることを想うと、看取りの気持ちには、リラックスした心と変わっていった。安心

を、おばさんのいのちに得ることができたといえるのかもしれない。

おばさんのいのちは、「小池千代」という彼女一人の生命体かもしれない。しかし、それはいのちを考えるとときの、最も小さな、単位にすぎない。おばさんのいのちは、同じ時代、同じ時間を、お互いに生きる我々、家族のいのちの一部分でもあるはずだ。おばさんのいのちが、この世から亡くなることは、我々のいのちの中の、おばさんという部分が亡くなることにちがいないだろう。まして、浄土の信仰のなかに生きようとする我々は、おばさんのいのちを、おばさんのいのちのみとしては、決してみない。阿弥陀仏という、大きな大きな「いのちのは

からい」に身をまかせる、仏につながるのちとして、見つめるのが自然であろう。私たち一人一人のいのちは、阿弥陀仏のいのちのもので、共有しあえるいのちと言ひ換えられるだろう。

それから、六カ月間、おばさんは、平然と時折、気管支炎症による呼吸困難を起こしながらも、生きつづけた。おそろく、倒れて数日にしろ、一カ月にしろ、それで往っていたならば、呆氣にとられるような、ボウ然として悲しみに恐そわれたことだろう。それは、いくら、もう助からない、戻らない生命と解っているも、我々は、死という別れの準備をする時間を心にもてずに、その時を迎えたか

らだろう。しかし、五百日間という時間は、別れの支度をするのに充分なほどの時間だった。言ひ換えれば、阿弥陀様は、別れの支度をするために、おばさんに、いのちの余韻を与えて下さったのだ。

別れの支度、しかし、それは、永遠の別れではない。明日が「さよなら」かもしれないと思った日から「また会おうね」といって病室を出た毎日の別れと、何らかわりはない。

きつと、また会えるのだから。信じることで、信は深くなつてゆくこと、これも、おばさんから教えてもらった。

(了)

日本における浄土教の高僧たち（下）



上野の 浩
うえの ひろし

弁長（一一六二—一二三八）

弁長は鎌倉初期、法然の弟子で、浄土宗鎮西派を開いた名僧である。浄土宗二祖、世に鎮西上人、二祖上人ともいわれている。弁長は筑前の人、俗姓、藤原

氏、幼にして出家し、寿永二年（一一八三）、叡山に登り、宝地房証真に師事して天台教学を学んだ。建久元年（一一九〇）、故国に帰り、たまたま弟の死にあい、世の無常を感じ、建久八年（一一九七）、京

都の法然を訪ねて、その弟子となった。

弁長は浄土の宗要を究め、元久元年（一二〇四）、鎮西に帰国して、各地に念仏を弘通し、念仏道場を建てたりした。とくに筑後に善導寺を建て、念仏の根本道場とした。また、肥後の往生院において「末代念仏授印」を作成し、浄土宗の伝法を制度化したのである。

法然没後、京都にて、浄土宗の正統派となったので浄土宗第二祖と称されている。

親鸞（一二七三—一二六二）

親鸞の事蹟は一般の資料にはほとんど

と記載がない。親鸞の出自は公卿の日野家といわれる。親鸞九才のとき、比叡山に登って二十年の修行をしたというが、この間の生活もよくわからない。

建仁元年（一二〇一）、親鸞二十九才のとき、比叡山を捨て、法然に導かれて吉水の集団に帰入した。比叡の、天台という体制を公認している思想集団よりも、弾圧の嵐を予感しつつあった専修念仏の世界を選んで、それに身を投じたのである。親鸞が比叡を下り、六角堂で百日の参籠をしたときに、聖徳太子が夢枕に立ち、その指示にしたがって親鸞は法然に接したのだと伝えられている。

法然の専修念仏の教えが次第に広まるにつれて、比叡山や奈良の太寺のねたみと攻撃を受けるようになった。やがてこの弾圧の嵐が吹き、承元元年（一二〇七）、親鸞三十五才のとき、念仏は禁止され師の法然とは快別し、法然は四国に、親鸞は藤井善信という俗人におとされ、越後の国府に配流の身となった。ところで親鸞は越後で恵信尼と結ばれる。

建暦元年（一二二一）、流罪になってから五年の後、親鸞は赦免になった。二、三年して親鸞は京都へは向わずに、常陸に移りすんだ。ここで庶民を相手に布教をはじめたのである。真宗最高の教義と

いわれる大部な「教行信証」（実際は「顕浄土真実行証文類」という）も実にこの地で著述されたという。

親鸞は法然のもとで修行をつんだころ、「行者宿報にてたとい女犯すとも、我玉女の身となりて犯せられなむ」という詩をよんだ。公然と女犯を口にしたのである。そしてまた越後で恵信尼と結ばれたころ、「愛欲の広海に沈没し……」とも告白している。すなわち僧として肉食妻帯の自覚を求めたものといえよう。親鸞は嘉禎元年（一二三五）、六十三才のころ、妻恵信尼を越後に残して、東国から生れ故郷の京都へ帰って行った。こ

の帰京は幕府の圧迫が原因ともいわれ、また門弟から師といわれるのを嫌ったためともいわれている。建長八年（一二五六）、八十四才のおり、東国に残してきたわが子善鸞を正しい信仰を曲げたという理由で義絶しているが、さぞ断腸の思いであつたらう。

「私が死んだら、この身を加茂川に入れて魚に与えよ」、これが親鸞の遺言であつた。

証空（一二七七—一二四七）

証空は法然の弟子で、鎌倉中期に浄土宗の西山派を開いた名僧である。証空は

源親季の長男、久我通親の猶子である。

十四才のおり法然について出家した。「観經疏」をはじめ浄土の法門を究め、また円頓戒を受け、各宗の宗要を学んだ。

建久九年（一一九八）、法然が「選択本願念仏集」を撰するに際し、勘文の任にあたり、正治元年（一一九九）、法然に代わって九条兼実の邸においてこれを講じた。のち日野の願蓮から天台を、公円から真言を、慈円から台密などを学び、建保元年（一二二三）、西山の往生院に住した。それゆえ彼の流派を西山流というのである。

証空は不断念仏、六時礼讃、問答論義

などの行事を開き、大いに浄土教の弘通に努力したのである。

一遍（一二三九—一二八九）

一遍は伊予国、道後に豪族、河野通広の子として生れた。十才のとき母に死別し、幼い心に深く無常感を与えられたものと思う。同年父の意志で出家をする。

三年をへて一遍は九州に渡り、法然の流れをくむ聖達、ついで華台のもとで専修念仏門の修行にいそしんだ。ここの勉強は三年に及ぶ。弘長三年（一二六三）、一遍二十五才のとき、父の死にあい、一遍は郷里伊予に帰った。それから七年の

間、その事蹟は明らかでない。

一遍はその一生を漂泊の旅にしている。それは文永八年（一二七二）、郷里に幽棲し、文永十年（一二七三）、三十才のとき、伊予、菅生の岩屋においての参籠が発心のきっかけとなった。すなわち翌十一年の春、一遍は郷里をでて、念仏勧化の旅にのぼった。一遍は熊野に参籠し、念仏の意義を神前の冥慮にゆだねた。そこで一遍は神の夢告をえたのである。そして一遍は「往生の主体は名号であって人ではない」とさとることができた。この神話による領解を時宗では一遍成道、時宗開宗の時としている。

ところで、一遍の遊行の旅は文永十一年（一二七四）、熊野からはじまった。一遍三十六才の壮年のときである。まず熊野から京都へ、さらに九州をへて建治元年（一二七五）、郷里に帰った。翌々年にまた九州に渡り、そして筑前から西海岸を南下し、ついで東海岸を北上して豊前、豊後に足をのぼす。折から北九州は蒙古来襲のさわぎの中に、一遍は狂人と嘲けられたが、七条の破れ袈裟をまとして遊行の旅を止めなかった。

弘安元年（一二七八）、九州から山陽道にのぼり、その途すがら人々を教化して旅をつづけた。そして京都から近江路、

木曾路と辿り、信濃の善光寺を目指した。さらに一遍の遊行はつづく。弘安三年（一二八〇）、一遍は信濃を発ち、陸奥、江刺に流れ、江刺から松島、平泉などをへて、弘安五年（一二八二）、鎌倉を目指す。鎌倉に留まること数カ月、ここから東海道の遊行がはじまる。ついで三島大社に参詣する。一遍のゆくところ法悦の念仏がわきおこり、人々は恍惚のあまり、死を急ぐ人さえあらわれた。

正応元年（一二八八）、一遍は海を越えて郷里の伊予に帰った。この翌年、一遍は讃岐をこえて淡路に渡った。そのころ一遍の体は病いにむしばまれていたので

ある。

一遍の宗教者としての生涯を決定づけるもの、それは彼が終生住むべき寺もなく、留まる草庵さえもたず、念仏の功德を説いて特に名号への結縁を民衆に教化するさすらいの旅に終始したことである。

蓮如（一四一五—一四九九）

蓮如は応永二十二年（一四一五）、大谷の本願寺で生れた。父は第七世法主の存如であるが、その母は祖母の侍女だった。そのころ、本願寺は「人せきたえて、参詣の人一人もみえさせたまわず」といわ

れるほどさびさびした姿であった。こうしたうちに蓮如もやがて妻を迎え、次々と子供をもうけていった。しかし、「一人分の汁を三人分にうすめて飢えをしのぐ」というほど寺は苦しい生活状態であった。長祿元年（一四五七）、蓮如四十三才のとき本願寺八世を継いだのである。

ところが寛正六年（一四六五）、寺は勢力争いの相手である比叡山方におそわれて、本願寺の堂舎は破却されてしまった。貧困と勢力争いからやってきた襲撃の難を逃れ、文明三年（一四七二）、蓮如は越前と加賀の国境の吉崎の地に移ったのである。このことを「なにとなくふと

しのびいでて」と蓮如はいっている。

ところがこの吉崎においては、しばらくの間に門徒が群がり、民衆が雲のごとく集ってきた。そして弥陀一仏をたのむことによって救いが決定されると説く蓮如の教説は、領主や寺社と衝突していた農民たちにとって、守護、地頭、寺社などを否定する根拠を与えたのである。

文明六年（一四七四）、北陸に吉崎を支持する一向一揆がはじまった。そこでこの地の守護職、富樫政親がこの一揆の弾圧にのりだした。危険が切迫した文明七年（一四七五）八月、蓮如は吉崎を捨てたのである。そしてひとまず河内におちつ

いた蓮如は、新しい拠点によってやがて大勢力を築きあげてしまった。文明十年（一四七八）、新しい本願寺の地を山城国山科に定めることができた。

蓮如は信本為本という立場を信仰の基本とした。そして膨大な親鸞の教説を簡略化した手紙形式の伝導文書をだしたが、それが「御文」といわれるものであり、生涯に二二〇通余の御文を創作したという。蓮如は貧困の環境から身をおこし、晩年、日本仏教中最大の教団を形成するに至ったのである。蓮如は庶民的、革新的であったというが、また組織者、政治家であったという評価もある。

季語やぶにらみ (五)

秋の七草のうち朝顔

木きの
下した隆りゆう
——いち

(隨筆家)

「読んで下さい」と手渡された「保谷の自然と緑を考える会ニュース」に、アサガオの記事が載っていた。

「平安朝初期に漢方薬として中国から渡来したアサガオは、江戸時代に観賞用として大

流行しました。(中略)このように身近な植物のアサガオですが、最近では大気汚染や酸性雨の指標として注目を集めています。アサガオでは、葉の黄化、褐色化、壊死や花の白色斑点などがその症状です。葉の症状がツルの

真ん中付近に見られたら大気汚染で、上部に見られたら酸性雨が原因です。このような目で、近所のアサガオを観察して下さい」

この「――考える会」は、東京の西郊にあつて無秩序なベクトタウン化が進む、保谷市在住の中年女性が集まつて、地道な活動をしているボランティアグループなのである。

そう言えば子供のころ、筆の穂先につけた酢の匂いにむせながら、朝顔の花びらに塗りつけてその色変わりを楽しんだのを思い出して、

「参考になさって頂きますよ」

と、私は感謝してこのニュースを頂いて来た。というのも、去年の暮から、私は庭のツワブキの葉に、ポツポツと焼け焦げたような穴があきはじめたのが気になっていたのであ

る。初めは虫が食ったかと気にもとめなかったが、一叢だけでなく、あちこちのツワブキの葉が同じような症状を見せるようになって、内心穏やかではなくなった。よく見ると、アジサイの葉にも同じ症状が表れていた。もしかすると酸性雨の所為では、と疑念を抱いたが確証はなかった。この会報の埋め草的な短い文章は、科学雑誌か何かの孫引きで、病虫害を度外視した独断と偏見に満ちた書きっぷりにはいささか疑問が残るが、書かれている大気汚染・酸性雨説は、確たる証拠があつて発表されたのであろうと、酸性雨に対する私の考え方の一つの指針にはなった。

和名「阿佐加保」の名が、初めて我が国の文献に登場するのは万葉集で、巻八に秋雑歌として、

山上臣憶良詠秋野花二首

秋野介 咲有花乎 指折 可伎数者 七種

花其一（秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数

ふれば 七草の花）

芽え花 乎花葛花 瞿麦之花 姫部志 又

藤袴 朝貞え花其二（萩の花 尾花葛花 撫子の

花 女郎花 また藤袴 朝貌の花）

が、二首一組、それも短歌と旋頭歌（七七・五七七）という珍しい組合わせで登場したこと、私は謎めいたものを感じるのである。

この阿佐加保、古来朝貞、朝貌、朝顔、朝容、牽牛子、薺、槿等々、いろいろな字を当てて訓まれている。また花も、現在我々が朝顔と呼んでいるものの他に、キキョウ、ムクゲ、ヒルガオ、リンドウ、果てはオモダカ、

カキツバタ等、季節に合わせ花まで挙げられて、挙げた人は自説を曲げないから、ますます収拾がつかなくなってしまふ。何が契機で朝顔論争が江戸後期の国学者の間に起こったのか定かでないが、それぞれ万葉以後の文献を楯にとって、甲論乙駁、丁々発止とやり合っているさまは、岡不崩著の「万葉集草木考」（昭和七年三月初版発行、五十一年二月十五日復刻版発行第一書房刊）の中の「阿佐加保源流考」に詳しい。

通読すれば争点は牽牛子（現在の朝顔）、桔梗、木槿、旋花（現在の昼顔）の四点に絞られるが、

「七草の中に木である木槿を入れるのはおかしい。萩も木には違いないが、小木だから良しとしよう」

「七種の花の意であるから、木槿であっても一向に差し支えない」

「いや、木槿も牽牛子も野原には野生しない。旋花こそ阿佐加保である」

「『新撰字鏡』に阿佐加保は桔梗（キチカウ）と出ているではないか」

「桔梗を阿佐加保とするのは『新撰字鏡』だけで、根拠に乏しい。著者の思い違いであろう」

「阿佐加保源流考」には、著名な国学者が大真面目で述べた言葉が書き連ねてある。著者の思い違いと、切って捨てたのは本居宣長の弟子で、近世考証学派の泰斗と目されている伴信友（一七七二—一八四六）であるが、何事も思い違いで片づけられれば、事は簡単である。信友の説は加藤千蔭の「七くさにもれ

しうらみや はれやらぬ きりのまかきの
きちかうの花」に触発されたかな、などと考えると、興味は尽きない。ただ、この岡不崩の論文は全篇古文体で書かれているのと、漢文が多く引用されているために、浅学菲才の私にとっては甚だ厄介な本だが、本職の画業の傍ら膨大な量の文献を渉猟し、この大著を物した根気は敬服に価する。

伴信友は若狭小浜藩を致仕した後、四十八歳で和漢の学に志したというから、この人も努力の人であるが、彼は牽牛子を以て朝顔と考えていたようである。少し長いが、彼の朝顔考を引いてみよう。

「あさかほとは、朝とく咲き出づる花の貌のいとうるはしきが、日毎に新しく咲きかはりて、其の朝がほのことにめでたきを称へた

る名にぞあるべき。(中略)かくして朝顔の名のきこえたるは、万葉集なる歌に見えたるぞはじめなる。其の中に山上臣憶良詠秋野花歌二首……、とよめり。然るに此の歌をおきて、朝顔を野によみたるはをさをさきこえず。此のものなべては人里にのみ生ひ継ぎて、野に生ひたるはいと見あたらぬが如くなれば、いかならむと云ひ思ふ人もありぬべけれど、土地によりてまれには、野原河原などに蔓ひわたりてあるなり。されど今の世に遊ぶが如き、とりどりにうつくしきはあらず。なべては浅葱の色したるが、いとまれには白きもあり。(中略)昔も人里に生ひ継ぎたるは殊にうるはしかりけむ。其れはもと野たるを移してよく養ひたるにて、其が種の漸くに弘ごりて、亦とりどりに異なる品の出来たるなるべく、又

外国より来れるもあるべきなり。(後略)「そして、憶良が目にしたのは、賤が家の垣根に咲いた花か、またその種子がこぼれたのが里近い野原に生えたのを見たものか、と推理している。外国から渡来したものもあると言っているのは、平安時代に中国から来た牽牛子を指したものであろう。しかし、その薬効については一言も触れていない。

朝顔にいろいろな花を擬するのは、朝、爽やかな花色を見せてくれるものなら、何でもそう呼んでいたとも受け取れる。季節違いで我々が奇異に感じるカキツバタやオモダカにしても、夏の朝顔だったものが、秋の花にまぎれ込んだのかも知れない。ただ言えることは秋の朝顔として挙げられた花々は、桔梗を除けばすべて一日花、つまり朝咲いて夕には

散るといふ共通点を持っていることである。

その儚さ故に、人々の無常観を誘って、より愛惜されたと説く人もいるが、これは後世の人の見解であって、万葉集が編纂された奈良時代の大衆が無常観を持っただろうか。仏教が伝来して日が浅く、その思想を教養としたのは、上流階級のそれも極く一部の人に過ぎなかったはずだからである。

江戸時代の国学者が参考にした文献は書写本であつたから、誤字もあれば誤解もあつたであらう。余白に記された覚書が時代を経るに従つて独り歩きを始め、定説となつてしまつたものもあるに違ひない。伴信友も、そんな意味のことを書き残しているが、領ける説で、憶良の歌に出てくる朝顔を、後の牽牛子と同類と断じたのは卓見である。ただ惜しむ

らくは、朝顔の薬効を強調して、他の草々の薬効に思ひを及ぼさなかつたので詰めを欠いた。というのは、憶良の歌をにらんでいるうちにふと思いついたのであるが、春の七草がすべて食草であるのに対し、秋の七草は薬草ではなかつたかということである。

早速、最も可能性のなさそうな尾花―ススキから調べてみると、根を煎服すると諸毒を排し尿道をよくすると出ているのである。以下マメ科の萩・葛以外はすべて利尿の効力を持つていた。葛の根は解熱の効果があるから利尿に通じるかも知れないが、萩だけは分らない。しかし、牛馬の飼料とするという記述があるから、滋養強壯の効果ぐらいはあるかも知れない。

平安時代に種子が牽牛子（ケンゴシ↓ケニゴ

シ)の名で入って来てから、急に文献に表れて、薬用の効果が喧伝された感があるが、朝顔は農耕の技術と共に大陸から流入し、憶良の時代には定着して、野草の趣を持っていたのだと思う。平安時代、新種の朝顔の種子を贈られた時、植物名を問うたところ、聞かれた方は、花の雅名を答えた。

「牽牛子ですよ。風薫るころ蒔いて下さい。立秋には大輪の美しい花が呼きますよ」

言われた通りすると、咲いたのは、今までに見たこともない大輪の色鮮やかな朝顔だった。

「おお、彼の地では朝顔を牽牛子と言うのか」

こんな行き違いはよくあることである。

そして、もう一つ思いついたのは、其一共二と番号を付されているところから、この二

首の歌は薬草の名を伝播させるためのメモではなかったかということである。

導師が其一を歌うと、一般大衆は其二を繰り返し唱和する。元来、旋頭歌とはそういう性質の歌だったようである。秋草の名を羅列するだけなら、わざわざ旋頭歌の形式をとらずとも、「藤袴 萩葛尾花 女郎花 撫子に添へ 朝顔の花」とでもしておけば済むことである。私にさえ出来ることが憶良に出来ぬ訳はなし、こんなしょうもない歌が憶良の作として遺されているのは、それなりの意味合いを持った歌だったのだ、という気がしてならない。それにしても、いまこの朝顔を桔梗とする説が大勢を占めているのは、如何なる根拠によるものか、どなたか是非教えて頂きたい。

(この項終わり)

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』九月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 千102 東京都千代田区飯田橋一―二一六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振替(東京) 八―八二二八七

話の旅 (二)

天草に旅して (二)

— 故・三宅春光師の生活と意見 —

まつ うら ぎょう しん
松 浦 行 真

(浄土宗出版室長)

先月号のこの随想のサブ・タイトル

は、「三宅春光師の生活と意見」であった。その三宅さんの名の上に、今月号からは「故」の一字を付さねばならなくな

った。

さる七月二十日、遷化されたのである。

下天草島のほぼ南端にある牛深の無量寺を辞する日、三宅さんはそこから車で

約一時間もかかる本渡市まで、タクシーに同乗して送ってくださった。飛行機の搭乗に間にあう、牛深から直通のバスが折悪しくなく、本渡発に頼らねばならなかったからである。

私はすでに前日から乗り物を予約していたのだが、それを断つての同行である。もし私のためにわざわざ本渡まで同行してくださるとしたら、こんな恐縮な話はない。

私はつよく断わった。
すると三宅さんは、

「ううん、違うんだよ。きょうは本渡で碁会があるんだよ」

そして、「ウッフン」という感じの、何ともいえないこどものような微笑を返

された。

車のなかでは、浄土門主で第八十世知恩院門跡だった岩井智海大僧正が、光明会にたいして持つておられた感触のごときものや、宗政への感懐、さては人物月旦から毎日唱える三万遍の念仏のやり方など、四方山の話をつががった。念仏のことはまた本稿でお伝えする機会もあると思う。

本渡ではバスの出るまで、半時間ほどの余裕があった。三宅さんは待合所の横にくつついた喫茶場に私を案内して、ビールを飲みながら、まだしのこした話の続きを聞かせてくださった。そしてバスのでるまで、窓外に立って、やわらかな微笑でもって、私を送ってくださったの

である。

私はいま、しみじみと、あの三宅さんの微笑の種々相を追懐している。

遷化される数日前、私は原稿を書いていて、わからない個所が二つでてきたので、三宅さんに電話をいれた。三宅さんはいつもと同じ口調で、その疑問を埋めてくださった。受話器を通じてだが、それが私の聞いた、三宅さんの最後の肉声となった。

取材に出ていたので、私が三宅さんの遷化を知ったのは、宗務庁に計報が届いた数日後であった。私は急逝に驚くと同時に、前記の電話のことを思いだし、不思議なご縁を思わずにはいられなかった。

——明蓮社正僧正司教擬講亮誉上人圓

阿無碍春光大和尚

世寿八十歳。

ともあれ、私はこの稿を書きつづけねばならない。それが私にできる、三宅さんへの唯一のお供養と思うので。



私が先月号の末尾に、「三宅さんから聞いたおどろおどろとした因縁ばなしを、次号で語ろう」と書いた一件は、吉水良祐上人が無量寺に住職をしていた時代の出来事だから、幕末の嘉永から安政にかけて、起きた事件である。

吉水良祐とは幕末から明治にわたっ

て、日本中に、「天草の上人」という呼び名で知られた名説法家だ。もっとも三宅さんによると、この地で彼のことを「天草の上人」と呼ぶひとはいない。

——大音寺さま。

である。良祐和上がのち、長崎の檀林・大音寺に晋董したことを諷したものだ。

「大音寺さまは牛深におられた頃から、話が非常に上手であられた」

というふうにする。三宅さんはじっさいに小僧時代、牛深の檀信徒がそう評判するのを、よく聞かされたものだ、筆者に語った。

さて、事件というのは、こうである。さる家の主人が、後妻を迎えた。その

主人には、先妻とのあいだに、まだ幼い娘が一人いた。その娘を、後妻が殺したのである。

それがいかにも、むごい殺し方だった。生き埋めにしたのである。

穴のそばに柿の木があり、その木には引っ掻いたような爪跡が永く残っていたというから、幼い娘の恐怖がどんなものだったか、察しられよう。穴から這いあがろうとすると、蹴り落とし蹴り落としたので、生爪が十本、ぜんぶ剥がれたと、伝えられている。

私は、たずねた。

「そんな大きな穴を、女手一つで掘ったのですか」

「いや、何人かいる家の使用人に、『う

まい具合にやれば、みやげをやるぞ」と言つて、米を何俵ずつかくれたという話が残っておりますね」

と、三宅さん。

「そのとき、女の子の父親はどうしていたのですか」

「商用めいた用務をおびて、よく旅に出るのですよ、主人は。その時を利用して実行した。三月三日の潮干狩りの解禁日だったといいますね」

生さぬ^な仲の者が、義理の子に不当な扱いをする動機には、大きく考えて三つある。

一つは新しく子ができて、まえからいる子がうとましく邪魔になった場合である。

二つには、その子が自分になつかない場合である。

三つには、血のつながりのある親がその子を可愛がつて、生さぬ仲の者がそれを嫉妬した場合である。

それらの動機はもちろん複合もありうるわけだが、この女性の場合は、新しく子供ができたという話は聞かなかったから、おそらくあと二つが複合して、彼女を異常な行動に駆り立てたのであろう。

この事件に遭遇した良祐和上は、被害者がまだ幼い子だったにもかかわらず、

——珠清院浄誉夢覚大姉

と、大姉号を贈った。

そればかりではなく、本堂左側の、墓地になつている小高い山のふもと近い斜

面に、長野の善光寺にある観音菩薩像を模して作られた観音さまを安置し、それが頂点になるごとくさらに三十三体の観音菩薩像を配して、不幸な子の霊を慰めた。この観音群像は昭和五十五年四月一日に、牛深市から文化財として指定されている。

しかも良祐和上は、無量寺に伝わる過去帳のその戒名のわきに、

——代々の住職は毎年一回、かならずこの亡者の菩提を弔い、回向をせよ。

と、みずから注書きをしているのだった。

これらの丁寧すぎる処置は、事件に遭遇した良祐和上の驚きをそのまま映しているが、じつはこの驚きには、もっと深

いものがあった。

ときどきヘンな現象——つまり現在の科学ではまだ解明し得ない超常現象が、現場付近でしばしば起きていたのである。

余談だが、筆者がある高名な心理学者から聞いたところによると、こうした超常現象は一種のエネルギー的なものに因っているのではないかと、現代の一部の新心理学者たちは考えているそうである。

そう推測される理由は、いわゆるそうした超常現象で、発端から数えて五十年を過ぎてまで現れるものは、ないからだろうである。五十年を過ぎると、伝説と化すか、あるいはしだいに人の口の端に

のぼることもなくなってしまう。

ということとはつまり、五十年を一クールとして、そうした超常現象を起こす一種の怨念みたいなものが、あたかも長期間放置しておくやがて放電してしまう電池のように、エネルギー的な性質を持つものだからではないか、というのである。

あるいは、そうかもしれない。

しかしこれは、学者の考え方である。

三宅さんは宗教家だから、見解も当然、違ってくるわけである。五十年の歳月はとくに過ぎ去っていたが、三宅さんはこの挿話を、次のような言葉でしめくくった。

「私はこの話を、ときどきお説教の題材

に使うことがあります。しかしそういう時はかならず事前にお墓にお参りしてです、『お嬢さんね、旦那寺の和尚は、もうこんなことは二度と起こらんようにということで、あなたの悲しい話を皆にするで、あなたもこのくらいところで、ひとつ怨みを解いてくれんか』と、まあ了解をとりつけるような気持ちで語りかけてから、するのですよ」

と。

無量寺の本堂には、額にいられた良祐和上の写真が、かかげてあった。

「おそらく、ここだけにしかないものだと思いますよ」

三宅さんのことだから、きっと良祐上人が得度をされ、またのちには住職もさ

れた、河浦町の崇円寺にも問うたうえで、そう言われたのだろうと思う。

驚いたことに、その写真には、淡々としたものがら、カラーづけがほどこしてあった。うち見たところ、晩年のもののように見うけられたから、明治に入っている作品であろう。写真に着色することが、明治の一時期、流行したと、ものの本で読んだ記憶がある。へたな着色は不自然さを倍増してしまうものが多いなかで、この良祐和上の像には色むらがなく、かつまた淡い色彩であることが、写真を安っぽさからすくって、かえってよかったように思われた。

この額には、良祐上人の辞世を記した紙片が、ともにはさんであった。

ふりつもる 雪のあかりに 暮れかねて 森に鳥の 声ぞのこれる

“声ぞのこれる”——ここは素直に鳥の声ととっておくのがいいのだろうが、私にはなんとなく、同時代の人びとの耳に残ったに違いない良祐和上の名調子が思われてならなかった。

(この項つづく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 二、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 三、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 九月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年 八月二十五日 印刷

平成二年 九月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八―八二―一八七番

好評

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、
讃重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、発願文、五懺
悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降
魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳 浄土三部経

選訳 三部経集

B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人

選訳 四帖疏

B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師

観經四帖疏

B6判五八四頁
価三、五〇〇円

和訳 善導大師

六時礼讃

B6判二六五頁
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)

雄秀 瀬村 編訳

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

寺念常 発行所

電話 0465-43-1352

振替 横浜3-8296番